

悩み・苦痛の逆療法

第1部 解脱の真理の発見

(43) 煩悩の解脱に宗教は関係ない

私は煩悩を解脱するために、禅宗の方法を実践し体験してきた。しかし、私は、唯神論者ではなく、唯物論者なのである。唯物論者であっても、煩悩の解脱は可能なのである。すなわち、煩悩の解脱は、苦痛を意識し味わい噛みしめ更には強めることだから、宗教と関係ないのである。

しかし、そうであるからといって、唯神論者が解脱できないものでもないし、人によっては神を信じるのが、苦痛を味わい噛みしめ更には強めることを、よりよく可能にすることはあると思われる。例えば、苦痛は神が我に与えた試練であると信じれば、苦痛を噛みしめ更には強めることが容易となる。従って、解脱しやすいのである。

一般的に、徹底した唯物論者と徹底した唯神論者とは、紙一重であると言われる。現生のごりやく（御利益）と来世の天国・極楽のみを唯一願う世俗的宗教ではなく、大宇宙を支配する神の摂理を敬虔に信じる宗教心と、徹底した唯物論者が信奉する精妙な自然法則への感嘆の心との間は、極めて近い、あるいは紙一重なのである。

一説によると、釈迦の考えは唯物論であるということも言われる。釈迦が生まれた時に「天上天下唯我独尊」と言ったというが、これは宇宙の中で自分独りが尊いという意味である。それは、釈迦以外に神は存在しないということと同じことである。それでは、釈迦が神かというと、釈迦の苦悩の半生を読むと、神というよりは全く人間らしいと言える。徹底した唯物論者は徹底した唯神論者と隣合わせであるというが、私も同感である。

ちなみに、キリストは自らを神の子であると言った。しかし、キリストが十字架にかけられた時に、彼は天を仰いで、なぜ神は我を救わないのかと嘆いたと書かれている。私は、これは極めて人間らしいと思う。なぜならば、この世

の中には極めて不幸な人が多くいるのに、神が存在するのであれば、なぜこのような不幸な人を救わないのかと、私ならずとも少なからざる人が疑問を持つからである。キリストが、十字架で苦しんだ時に、これと似たような心境になり、なぜ神は自分を救わないのかと言ったのではないかなと考えるから、ここにキリストの人間らしさを感じるのである。もっとも、神が存在しても不幸な人が放置されていることは、既に多くの人疑問を呈し、唯神論者からの反論、例えば、「神の広い心は人智を超えるものである」とかがあることも知っている。従って、最終的には、各個人が神を信じるか否かの判断の問題であり、神の存在・不存在の仮説に対する検証ということはできないのである。

それとともに、禅宗でも、仏という言葉がよく使われるが、この仏の意味は、神という意味に解釈するよりは、悟りという意味に解釈した方が、理解しやすいことが多々あるのである。例えば、即心即仏（心のままに任せれば仏になる）の仏は、神というより、悟りである。

私自身、先祖を敬う心もあるし、墓参りなどの祭祀は行っている。これは、唯物論とは矛盾しないのである。自然法則に則った心の作用として、自らの祖先を敬い、祖先の思い出を大事にし、祖先を追慕することは、真に自然な心なのである。

結局、煩惱の解脱は、苦痛を味わい噛みしめ更には強めることであるので、宗教とは関係ないのである。それとともに、苦痛を味わい噛みしめれば、神を信じるか否かは、重要ではなくなる。その理由は、「苦しい時の神だのみ」というように、神が必要なのは苦しい時で、煩惱を解脱して、苦しみが薄らぎなくなれば、神の存在はそれほど問題でなくなるからだ。自己に本来具わった心性を徹見する見性に達した時に、そこに神を見るか否かは、人によるのである。

これを短歌にすると、

人により 神を信じて 解脱する
神がなくても 解脱はできる

となる。